地域の人たちに憩いの場 交流の場を提供する

北海道ニセコ町

あそぶっくの会

蝦夷富士と言われる羊蹄山の麓にある人口四千六百ほどの町、ニセコ町。そのニセコ町の中心街に、公設民営の学習交流センター「あそぶっく」がある。あそぶっくは、図書館機能を備えた町民のたまり場。

朝、農業簿記の研修で役場に来た若者たちは、休憩時間になると一目散に「あそぶっく」に駆けつけ、めざす本を見つけると寸暇を惜しんで読み耽っている。「ここには結構いい本があるんすよ」と。その間、お年寄りやご婦人が本を返しに来たり、借りに来たりしている。あるいは、「バスが来るまで休ませてゃ」とおばあちゃんが、備え付けの麦茶を飲んでホッと一息をついているが、午前中は図書館特有の静かな時間が流れている。

午後になると、様相は一変する。学校を終えた小学生や中学生が大挙してやって来る。中学生はトランプを借り出し、「ダウト」に興じている。小学生はコンピュータの電源を入れてもらい、「きかんしゃトーマス」のゲームに夢中になっている。コンピュータは利用頻度が高く、この時間帯は三〇分間という時間制限がある。もちろん読書に耽っている子もいる。手塚治虫の

「ブラック・ジャック」の一巻目から読みはじめ、今日一日で五巻目まで読み進んだという。

あそぶっくの名称の由来は「あそぶ」と「ぶっく」の二つ単語を合成してつけられた。町民からの公募でこの名に決まった。言葉どおりに遊ぶと読書が共存しているといえる。

郵便局舎を町が取得し、その活用方法について、町役場と公募による住民などでの検討委員会を設け、討議を経て建設された。およそ二万冊の書籍や雑誌の図書館を中心に、じゅうたんが敷かれた絵本のコーナー、おばあちゃんが休んでいた町民サロン、用途を限定しないコミュニティルームなどを備えている。平成十四年四月にオープンした。情報公開に対応した公文書の保管・開示などの役目も担っているが、町の文化・教育の拠点、住民の憩いの場としての役割を担っている。

この施設を七〇人ほどのメンバーで構成される「あそぶっくの会」が運営している。読み聞かせグループ「お話の会」などが母体となって、施設の管理、運営のために立ち上がった。同会の仕事は、大きく二つ。一つは、本の選定、カウンター業務、道立図書館と

の連携などの図書館業務。ここでは、メンバーのうち、六人が有償でこの事務をこなしている。もう一つは、ここを拠点としての文化活動の推進とでも言うべきもの。毎週木曜日、絵本コーナーでの読み聞かせや紙芝居を開いているのをはじめ、読み聞かせやパネルシアターなどを小学校や幼稚園に出向いて実施している。また、講演会、コンサートなども、ここを会場として開かれている。

逢坂町長が「あそぶっくは将来への投資」とその存在意義を強調するように、町民のサロンとして、住民の交流の場として活用され、さらにそこから、新たな活動が生まれることを期待したい。

連絡先

ニセコ町学習交流センター「あそぶっく」

〒048-1502　虻田郡ニセコ町本通り105番地

TEL0136-43-2155

http://www13.ocn.ne.jp/~asobook/